

# 終わりの始まり

師走の衆議院選挙も終了。後り2週間余りで新たな年を迎えます。今年も最悪の一年だった？ でしょうか？ 激動の終わりの始まりはこれからが本番です。百年に一度あるかないかの歴史的な事象が、絶え間なく繰り返されています。後世から振り返ると、大きな転換点と言えるでしょう。

財務省の傀儡、嘘つきリダーは素人並の失政で不況を招いた。菅前総理に見るように馬脚を現すものです。国民を舐め切った野田首相も結局その程度です。

(有)西川経営オフィスサービス  
**中村会計**  
**事務所便り**  
 2012年12月17日 (月) NO. 282  
 地域から明るい未来を作ろう

わが国には二百年以上続いている会社が三千社あると中国では九社、韓国はゼロだと言います。日本人は創業の理念を大切に、常に時代の変化を先取りし、命を吹き込んできた結果なのでしよう。社員と目標と情熱を共有し、さらに謙虚で誠実なのです。これで続かないわけがないのです。会社も社会に対していったい何をしているのか常に問われます。安部総裁は参勤交代？ の為すでに、一月訪米の手配を選挙中から行ってました。

正月休み29日～翌6日

日本の裁判官は一人当たり二百〜三百件の事案を抱えていると言われ、裁判官がドイツの約一割では、日本の民主化に道遠し司法の独立は実現しない。

当然、日本の裁判所は、どこでも出来るだけ多くの事案を「示談」や「和解」で済ませるよう誘導する傾向がある。これが、地元の顔役や弁護士などが影響力を持つ温床になるのも事実のようです。

「日独裁判官物語」という映画をご覧になられた方は、その冒頭のシーンに「二歩踏み出すときは、いつも一歩退くことを考えよ。そうすれば垣根に角をひっかけた羊の真似をせずにすむ。物事を始めるときは、いつも手を引くことを考えよ。そうすれば、虎の背 中に乗ってもおりれなくなることはない」

## 法は正直者を守るか

種の衝撃を受けられたと思う。その映画が映し出すシーンはこういうものです。

先ず、日本の最高裁の光景。裁判官はお抱え運転手付きの黒塗りの高級車で出勤する。玄関口には男性秘書と女性秘書が一人ずつお出迎え、女性秘書が先導し、男性秘書は鞆を持って恭しく後に従う。

次に、同じ機能を持つドイツの「憲法裁判所」の光景。大雨の中を雨合羽を頭からかぶった男性がスクーターで出勤する。スクーターを所定の場所に駐めた男性は、雨合羽を手で押さえながら玄関口まで歩き、足早

結局はカネですね。金より大切な信頼を「近江商人」は、売り手の従業員、買い手の顧客、世間の社会、この「三法よし」で何を何百年も継承したのです。欧米の「新自由主義」が主流となり、裏切る方が儲かる社会が、まかり通る様になっていないか。

にビルの中に入る。彼が裁判官なのです。これは、何も裁判所に限った事ではなく、現在の日本を象徴的に現す光景です。下はよく働くが、うまく出世コースに乗りたいたいで、決して無理はしない。常に上の意向を確かめながら、流れに逆らわないように細心の注意を払う。一旦流れに乗って、上に上がってしまえば、黒塗りの専用車や忠実な秘書を使え、手厚い退職金を貰って安定した老後を過ごせるからです。

裁判官の投票が終わったが早く国民投票は何とかしなければ片手落ちです？。信頼社会の構築は崩れていないか。法はそれに手を貸していないか。日本の安心が消え、根底から溶解してはいないか。

政治家の器と責任は重大で時に国家を滅ぼします。より多くの評価の集合が不誠実を見抜きます。したがって「オーブン」が最強でしょう。



「不正を働くことは、結局自分を欺くこと」です：が。 — 菜根譚